宿泊学習の教育的成果に関する研究

高畑　勇吾　(生涯スポーツ学科　学校スポーツコース)
指導教員　柴田　俊和

キーワード：宿泊学習，主体的活動，発達段階

1．緒言

宿泊学習は平素と異なる生活環境で行うことにより，人間関係や集団生活の在り方や公衆道徳などについての望ましい体験を積むことができる活動である．また，筆者がボランティアとして参加している京都市立の小学校では，長期宿泊学習が全校で行われている．

しかし，学習指導要領では目的などが示されているが，具体的実施内容に関しては各学校単位の実態に合わせて行うように示されている．つまり，実施内容により宿泊学習の成果が異なると考えた。

そこで本研究では，子どもと教員の双方から宿泊学習についての意識調査を行った．その結果から，実施された宿泊学習は教育的に成果があるのかを明らかにすることを目的とした．

２．研究方法

本研究の調査対象者は，京都市立小学校 R 小学校の４年生 25 名，５年生 27 名，合計 52 名，同校の教員 5 名である．子どもには，選択式，教員には，記述式のアンケート調査を行った．

３．結果と考察

児童の調査結果は，多くの児童が各質問で目標を達成できたと答えていた．また，質問によって学年差があることも明らかになった．４年に比べ，５年のほうが目標を達成できなかったと答えた児童が多かった．その反面，４年は，大変よくできたと答えた児童が多かった．

教員の調査結果は,以下の結果が得られた．目標は自主自立・自然体験に設定していた．宿泊学習の成果は，自立への一歩を踏み出すことができ，自己の役割を果たすことができるようになることが明らかになった．問題点は，安全面の確保と自主運営の線引きの難しさが上げられた．改善点としては，児童が主体的に動くことができるプログラムの設定が上げられた．

児童と教員の調査結果から、児童の考えと教員の考えは、概ね一致する点が多かった．しかし，上級生がリードするなど発達段階に応じた行動ができるようになる為にも，実施プログラムを再検討し，児童が主体となって活動できるように線引きをして，教員がサポートすることが必要であると考えられる．

４．まとめ

宿泊学習で大切なことは、実施するプログラムでなく，児童の実態を細かく把握し，その実態に適した目的を立てることである．さらに,その目的に応じてプログラムを企画し，そのプログラムに児童が主体的に取り組むことができる運営方法で実施することが大切である．その中で気をつけなければならないのは，安全面への配慮である．どんなに素晴らしい目的をたて，プログラムを完璧に実施しても，児童が危険な情況にさらされないように配慮する必要があることがわかった．教員が企画したプログラムを，児童が主体的に仲間と協力して取り組むことで，教員が望んだ成果と児童が感じる成果が一致することがわかった．

参考文献

1. 兵庫県南但馬自然学校,自然学校実践事例, pp. １-36.
http://www.shizengakko.jp/school/sizennjirei.pdf,　2012/11/20
2. 金羽麻里奈（2012）児童・教員にとっての効果的な長期宿泊学習の研究―京都市立小学校の実践を通して,滋賀大学大学院教育学研究科論文集　第 15 号，pp. 11-18.
3. 上坂操(2013)自然体験学習の今日的な教育課題の現状と対応について，びわこ成蹊スポーツ大学教職実践演習，講義資料.